

# お騒がせマリッジ 1

*K a n a & E i c h i*

---

七福さゆり

*Sayuri Shichifuku*

*termity*



エタニティ文庫

## もくじ

お騒がせマリッジ1	5
番外編 宝条瑛知のあるご機嫌な一日	247
書き下ろし番外編 お騒がせテレフォン	323

お騒がせマリッジ 1

第一戦 やっぱり男なんて大嫌い！

『……こうしてお姫様と王子様は結ばれ、一生二人で幸せに暮らしました。おしまい』

小さい頃、私は絵本の中の恋に夢中だった。

『お母さん、もう一回読んでえ！』

『また？ 夏奈は絵本が大好きね。……もう、あと一回だけよ？』

『うんっ！』

いつか私も大好きな人と、素敵な恋をするの。

そんな夢を胸に抱き、ページがポロポロになるまでお気に入りの絵本を眺めていた。

小さい頃はお母さんに読んでもらっていたけれど、そのうち字が読めるようになって……私はますます恋物語にのめり込んでいった。

でも、そこに描かれているのは、現実じゃない。

しよせんフィクションに過ぎないって気づいたのは、いつだったろう。



「聞いてよ、夏奈！ お父さんったら、また浮気したのよっ！」

「へえ……」

「今度の相手は家の近所にある本屋の店員！ しかもすごく若い子だったのよ！ もう、いい歳してバカじゃないのっ！」

こんな風に母から父の浮気について聞かされるのは、もう何度目だろう？

両手と両足の指では足りないのは確かだ。

「じゃ、今度こそ慰謝料ガッポリ取って別れてやったら？」

私、白咲夏奈はテーブルに肘をつき、コンビニで買ってきたお煎餅をポリポリとかじりながら、傷心中の母に適当なアドバイスをした。

「夏奈はいつもそればかり……！ 別れずに済む方法を考えてちょうだいよっ」

「ていうか、なんで別れるっていう選択肢がないの？」

残業で疲れたから、リビングにある大きなテレビでバラエティでも見て寛ごうと思っただのに、まさかこんな話を聞かされるハメになるとは……

「……もう、夏奈は冷たいっ！ お母さんがこんなに悩んでるっていうのに……冷凍庫に入ってる氷よりも冷たい娘よ！ このブリザード娘！」

「いやいや！ そこまで冷たくないでしょっ」

こんなことなら、テレビなんか見ようとしなくて、さっさと自分の部屋に引っ込めばよかつたなあ。しかもチャネル争いに負けて、バラエティじゃなくてドラマを見ることになっちゃったし。

「男は浮気する生き物なんだから仕方ないって！ 母さんもいちいち腹立てないで、見逃してやりなよ。俺の今カノはそこんとこ、ちゃんとして理解してくれるよ？」

チャネル争いに勝った兄は、スマホをいじりながらソファにふんぞり返り、私よりもさらに最低なアドバイスをした。

見てないならチャネル変えてよ。会社の女性社員がハマってるドラマだから、チェックしておくって何!? この女好きめ！ お茶を飲みながら、私は兄をジロリと睨む。

ちなみに私の三つ年上の兄である育也いくやは、父の経営する製薬会社に役員として勤めていて、将来は跡を継いで社長になるらしい。

社内の女性社員に手を出しまくっているそうなので、そのうち刃傷沙汰はなぶさたに巻き込まれないかちよつと心配……は、してない。もしそうなったとしても、自業自得だ。

「お父さんも、育児も最低！」

さつきまでドラマを真剣に見ていた妹の結奈ゆきなは、眉を吊りあげて怒っている。

「お姉ちゃんはまだ少しお母さんに優しくしてあげてよ。お母さん、元氣出してね！ あたし、お父さんが反省するまで口利くちかないから！」

結奈は大学生なのに中学生ぐらいにしか見えない幼い顔立ちだから、声を荒らげたところでちつとも怖くない。

「結奈！ あなたってば、なんていい娘なのっ！ 私の子供はあなただけよっ！」

母は結奈にヒシツと抱きつき、わざとらしく泣いている。家族の中で母の愚痴ぐちを真面目に聞くのは、結奈だけなのだ。

「お父さんったら、どうして浮気を繰り返すんだろうね。お母さんのこと、『愛してる』っていつも言ってるのに……」

「バーカ。だから何回も言ってるだろ？ 父さんに限らず、男はみんな浮気する生き物なんだって。従妹いとこの奈緒ちゃんだって、この前旦那に浮気されたろ」

「それは旦那さんが悪くて……」

「今の旦那だけじゃないだろ。あいつ、結婚前に付き合ってた彼氏にだって、浮気されたじゃん。お前覚えてねーの？」

考え込んでいる結奈を見て、兄はなぜか得意げに語る。

「そ、それは一部の人で……」途な男の人だって絶対いるもん！」

食い下がる結奈を、兄は鼻で笑う。

「バーカ。男はみんな浮気するんだって！ つーかき、お前だっていくら好物でもチヨコばっかり食い続けてたら飽きるだろ？ たまにはしょっぱいものだって食いたくなるだろ？」

「まあ、うん……たまにはポテチも食べたくなるけど……」

「ほーら。な？ そういうことだよ」

浮気をお菓子にたとえるな！

何、その、上手いたとえ言いました、みたいな顔！ すっごく腹が立つ。

好きになった人が、自分だけをずっと見ていてくれるなんて限らない。

他の女の子に心変わりしないなんて言いきれない。

私は女癖の悪い父と兄、そして男に泣かされ続ける母と従妹いとこに囲まれて育った。だから、早々に男の人への憧れは捨て去った。

そして男って最低——……と思いつながら生きていたら、いつの間にか二十四歳。年齢イコール彼氏いない歴だけど、これからも彼氏を作る予定はない。

彼氏も旦那もいらぬ。恋愛なんてしたくない。

運よく大手企業に就職できて、すでに老後の資金もコツコツ貯めているから大丈夫。きつと一人でだって生きていけるはずだ。

お茶のおかわりを取りに行くためにテーブルに手をつけて立ちあがると、手元がガタンと大きく揺れた。

「あれ？ なんかテーブルの脚、グラグラしてない？」

「そうなのよ。お父さんの浮気に腹が立つちゃってね」

「う、うん？」

浮気とテーブルのグラグラに、どんな関係があるのだろうか。

「持ち上げて、お父さんに投げつけてやったら脚がグラグラになっちゃったわ。新しいの買わないとダメかしらねー？」

な、投げたの!?

ちなみにテーブルは五人で座れるタイプのもので、決して軽くはない。御年、五十五歳の母がどうやって持ち上げたのだろう。

ふと近くの壁を見ると、少し……いやかなりへこんでいた。

今朝父はピンピンしていたから、どうやらダメージを受けたのは浮気した父ではなく、テーブルと築二十五年のこの家だったらしい。

「わざわざ買わなくていいよ。こんなのに直せるし」

まだそこまで遅い時間じゃないことを確認して、私は部屋から工具箱を持ってきた。この程度の修理なら、騒音で近所迷惑になる心配はない。

「本当に直せるの？」

「うん、これくらいなら余裕だよ」

心配そうに覗きこむ母を横目に、テーブルの脚の部分の古い釘を外して、新しい釘を打ちこんだ。

「あ、塗装が剥げてる。これは次の週末に直しておくよ。どうせなら気分を換えて新しい色にしてみる？」

「そんなことまでできるの!？」

「うん、できるよ。何色にするか決めておいて。持っていない色なら買い足さないといけないから。これ、カタログね」

「助かるわあり! あ、じゃあついでにキッチンのとこの棚も直しといてくれる? 少しガタガタしてるのよ」

「うん、いいよ」

私の趣味は日曜大工だ。力仕事だってお手の物。だから男に頼らなくても生きていける。私は男となんて関わず、これからも心穏やかな日々を過ごしていく。

——と、思っていた矢先のことだった。



「すまない……!」

金曜日の夜、珍しく早く帰ってきた浮気者の父は、着替えもせずスーツのまま土下座していた。

「えっ! お父さん、何してんの?」

しかも母ではなく、なぜか私に。

「……夏奈に、頼みがあるんだ」

嫌な予感しかない。土下座までして頼みたいことつてナニ!?

「やだ。き、聞きたくない……」

断っても、父は頭を上げようとしない。

「そんなことを言わずに……頼むっ……!」

「……わ、わかった。一応は聞くけど、引き受けるかは内容次第だから。それでもいいなら、どうぞ?」

父は一瞬顔を上げて嬉しそうな表情を見せ、またすぐに頭を下げた。

「ありがとう、夏奈! ……実はな、宝条さんちの次男と結婚して欲しいんだ……!」

「……は!？」

唐突すぎる話に、私は口をあんどり開けたまま、閉じることができない。わざわざ家族みんなをリビングに集めるから、ついに熟年離婚? と思っていたのに、どうしてこんな展開になるの!？」

「実はさー、うちの会社潰れそうなんだわ」

週末は女と遊び歩いていて、いつもは家にいない兄が、スマホをいじりながらポツリと呟いた。

「えええええ!? お兄ちゃんの女癖が悪すぎるせいだ!? 会社潰れそうって、一体どんな問題起こしたの!? まさか手を出した女性社員たちに集団で訴えられちゃったか!? 最っ低ー!」

「育也、あんたって子は……」

「育兄、最低……」

女性陣に冷たい眼差しを向けられ、兄は慌てて首を左右に振って否定する。

「いや、オレのせいじゃねーから! 業績不振で、資金繰りがヤバいんだっての!」  
業績不振とは、初耳だ。

「うちが倒産しそうだからって、なんで私が宝条さんって人と結婚することになるの? というか宝条さんってどこの誰!？」

「……お前なあ、自分んちがやってる会社の親会社ぐらい覚えとけっつーの。宝条さんは、宝条グループのトップ」

狼狽する私に、兄がジトリと呆れた視線を向けてきた。

お兄ちゃんだけには呆れられたくないし!

「で、うちの会社が潰れそうなこと、宝条グループの次男と結婚すること、どんな関係があるの?」

私の質問に、父が土下座したまま答える。

「今日、援助を頼みに行ったら、宝条さんちの次男と、夏奈か結奈のどちらかが結婚するなら、会社を立て直せるだけの援助をしてくれると、約束してくれたんだ」

勝手に約束してきちゃったってこと!？」 というか……

「……む、む、娘を身売りする気なの!？」

驚愕を通り越して呆れる私に、兄はあっさり頷いた。

「結奈はまだ大学生だし、するしたらお前だろ。ってことで、一つよろしく!」  
流しに溜まつてる皿洗つといてね! みたいなノリで言われて、カチンとくる。

「サラッとやわらないでよ! この馬鹿兄貴!」

お兄様に向かって馬鹿とはなんだ、とか騒いでいるけれど無視! とりあえず土下座したままの父から、詳しく話を聞くことにした。



「それで、宝条さんちの次男ってどんな人？」

「下の名前は瑛知で、歳は三十三だ。次男で跡取りではないから、結婚しなくても問題はないんだが、三十歳を過ぎてても結婚していないのは、宝条家としては体裁が悪いそうだな……」

近年は晩婚化しているから、そんな男性はたくさんいる。それなのに古い考えにとらわれているなんて、すっごく面倒くさそうな家！

宝条グループは百年以上の歴史がある製薬会社で、国内外にいくつもの子会社を持っているそうだ。跡取りではないにしろ、そんないい家柄の次男坊なら引く手数多のはず。それなのになぜ潰れかけた会社の娘を妻にしたいのだろう。

しかも私は自分で言うのも悲しいけれど、容姿端麗なわけでもないし、学歴だって普通。取り立てて特筆すべきところなんてない。そんな女を妻にしたい理由は一体何？！

怪しい。絶対に怪しい！

「その瑛知って人、生理的に受けつけないぐらい不細工なの？ それともすっごい性癖があるとか？ 大切な娘を嫁にやるつもりなら、もっと情報をちょうだいよ」

行く気なんて、少しもないけど！

「すまん。今日約束したばかりだから情報はほとんどない。あ……せ、性癖はわからないが、かなりの美丈夫らしい」

びじょうふ？

ますます怪しい。お金持ちでイケメンなら、やっぱり引く手数多じゃない。女の子選び放題のバイキング状態でしょ？

「……それで？」

父に顔を上げてもらい、じっと目を見つめる。すると父は居心地の悪そうな顔で、ポツリと答えた。

「実を言うとな、かなりの変わり者らしいんだ」

ほら、きた。やっぱり問題アリだよ。

「や、やっぱり変な性癖が……」

「お前な……いい加減、性癖から離れろよ」

兄が眉を顰めて、ため息をつく。

傍観者は黙ってて！ と言いたくなかったけれど、今そんなことを言ったら間違いない面倒なことになる。今は喧嘩している場合じゃないし、グツと堪えた。

「安心してくれ。その点は心配ない」

「どういうこと？」

結婚するということは、……想像したくないけれど、夜の生活も求められるだろう。

さあ、お父さん！ 私をどう納得させるつもり？！

「瑛知くんが結婚する条件として出したのは、『別居』だ。しかも緊急時と仕事絡みのパーティー等の同伴以外は顔を合わせることも、連絡を取り合うこともしたくないらしい。……つまり、形だけの結婚だ。ちなみに次男だから子供を作る必要もないということで、夜の生活もナシにしたい……ということだ。つまり、その……だな。性癖の心配はしなくても問題なさそうだけ」

性癖うんぬんに関してはさすがに言いづらかったらしく、父の声が小さくなる。

「どうだ？ お前は一生結婚しないといつも言っているが、悪い話じゃないだろう？」

いや、悪い話とかいい話の問題じゃなくて……

「お前の歳なら、周りにも結婚している子がいるだろう？ それにもう数年経てば、『私も結婚したい！』とか思うようになるんじゃないか？ それなら、今……」

……そもそも私の男の人に対する夢を打ち砕いたのは、誰だかわかっているのだろうか。ムカムカしてきて、胃のあたりが気持ち悪い。薄くなってきた頭の毛を全部むしり取ってやろうか！

「周りなんて関係ないし、私、未来永劫結婚したいなんて絶対思わないし！」

キツパリ言い切ると、兄が小さくため息をついた。

「お前が嫌なら、結奈に頼むしかないか……まあ、十八歳過ぎてるし、法律的には何の問題もないけど……ちよーっと、気が引けるよな」

私ならいいってのか！ この最低兄貴！

怒りにワナワナ震えていると、結奈が目には涙をいっばいたためながら頷いた。

えっ!? なんて頷くの!?

「わ、わかった……仕方ないよね。このままじゃ、会社潰れちゃうし……大変だもんね。あたし、いいよ。け、結婚……する」

「えっ!? な、結奈？ ちよっと待って！」

小さい頃から素直で純粋で、思いやりのある優しい子だと思っていたけれど、まさか承諾するなんて！

「会社立て直すの……頑張ってるね！ あたし、大学生だし、頭悪いからあんまり役に立たないかもしれないけど、お手伝いできることはなんでもするから、言ってるね！」

「ちよ、ちよ、ちよっと待ってっば！ 待ちなさい！ 結奈が結婚なんて絶対にダメ！」

それだけはダメだ。私は恋愛を諦めているけど、結奈は諦めてない。むしろ素敵な恋に憧れているのだ。

結奈が素敵な恋愛が描かれた少女漫画や小説をたくさん持っていて、どれもシワシワになるくらい読み込んでるの、お姉ちゃん知ってるんだから！

「お姉ちゃん？」

結婚は嫌だけど、会社が潰れたら家族が路頭に迷う。私は勤め先の会社からお給料を

もらっているし、一人ならやっていける。でも、父の収入に頼っている母と結奈は生活できなくなってしまう。それに浮気者の父と女癖が悪い兄も、一応家族だ。捨てるわけにはいかない。

でも、でもでもでも！ 私が……結婚!?

「じゃ、お前が結婚してくれんの?」

「……っ……そ、それは……」

いや……いやいやいや！ 結婚なんてしたくない！ 形だけの結婚だろうがなんだろ  
うが、結婚は結婚じゃない！ 私は一人で生きていくって決めたのに！

「お、お姉ちゃん、無理しないで。あたしは大丈夫だから」

結奈の目から涙がポロリと零れ、カーペットに染みを作っていく。

いや！ 無理してるのは、どう見ても結奈だから！

「できないなら茶々入れんなよ。結奈、頼むな」

「お父さんが不甲斐ないばかりに、すまないな……結奈……」

「……うん……まかせて……」

消え入りそうな声で言った結奈は胸をトンと叩き、悲しそうな笑みを浮かべている。

ダメ！ それだけは絶対にダメ！

「ま、待ってって言うてるでしょ!？」

自分でもビックリするぐらいの大声が出て、耳がキーンと痛くなった。

「……わ、わかったよ！ すればいいんでしょ!？ 私が結婚する！ 結奈が結婚

する話はナシ！」

「お姉ちゃん、でも……」

キョトンとする結奈の涙を、私はティッシュで拭ってあげた。

「いいからあんたは黙ってなさい」

結奈はお人好しだから、小さい頃からいつも貧乏くじばかり引かされている。この

まま放っておけるか！

「お、マジで？ よかったー。さすがに結奈は可哀相だしさ」

兄は相変わらずスマホを離さず、軽い調子で笑っている。

……前言撤回。このクソ兄貴だけは路頭に迷ってよし！ どこぞの女のヒモにでもな

ればいい。兄のことだから『この生活もなかなか楽しいな』なんて言い出しそうだ。

「……そ、その代わり、条件は絶対に守ってもらうからね！ わかった!？」

こうして、一生男と関わらずに生きていこうと誓っていたのに、私の結婚はあっさり決まってしまった。



それからうちの父親と宝条さん側が話し合い、私と瑛知さんそれぞれの都合がいいときに顔合わせをして、そのまま婚姻届を出すということになった。

夫になる宝条瑛知さんはかなり多忙な人らしく、約一ヶ月経った今も、私は『白咲』姓のままだ。

彼が一生忙しければ結婚せずに済む。このままずーっと忙しければいいのに！と思っていたのだけれど、とうとう明日の土曜日に顔合わせをすることが決まってしまった。

ヤケ酒したい……

そんなやさぐれた気持ちで仕事をしていたら、制服のポケットに入れていたスマホがメールを受信して、ブルブル震えた。

高校時代の友達から、飲みのお誘いだ。

「……よっしゃあ！」

すかさず『絶対に行く！』と返事を打ち、定時で上がれるように仕事に精を出した。

こんな日は、飲まなきゃやってらんない！



仕事を終えた私は、高校時代の友達二人と一緒に、ビルの最上階にあるオシャレなバーに来ていた。

最上階だけあって夜景がすごく綺麗。宝石箱をひっくり返したって表現がピッタリ。

そして私が飲んでいるのは、ブルーのグラデーションが綺麗なカクテル。両隣にいるのは、高校時代という青春を共に過ごした里美と志穂。

独身最後の夜。ああ、なんだかセンチメンタルな気分になっちゃ——

「まさかあ、夏奈が結婚するなんてねえ……っ！ ついこの間まで『一生結婚しないっ！』って言ったのに……裏切り者っ！ そのカクテルよこせーっ！ アタシが飲んじゃうっ！」

「いやいや、それもう二十回ぐらい聞いたし。ていうか、それ以上飲んだらヤバいから！」

——ちっともセンチメンタルになれないでいた。

私がカクテルを奪い返すと同時に、里美が志穂にお水を差し出す。

「弱いのに飲み過ぎるから悪酔いするんだよ？ ほら、もうお酒じゃなくて、水飲んで」

「やーよ。まだ飲むうー！ あはっ……アレ？ あそこにイケメンスーツ軍団がいる

よっ！」

志穂はお水を飲むことなくカクテルを呼ると、フラフラと窓際のテーブル席へ向かう。そこには志穂の言う通り、容姿端麗な男性三人組が座っていた。

「ちょ、ちょっと、どこ行くのっ!」

里美と一緒に慌てて追いかけたけれど、時すでに遅し。

「こんばんはあ〜! 私たちい、あっちで女の子だけで寂しく飲んでるんですけどお、一緒に飲みませんかあ?」

もう、ナンパしたあとだった。

や、やりおった……!

いきなり逆ナンされた男性グループは、呆気にとられている。

「す、すみませんでした! 少し悪酔いしてしまったみたいで……」

慌てて間に入って謝ろうとしたら、ひときわ目を惹く容姿をした男性にジロリと睨まされた。

目つきが鋭く、細いフレームの眼鏡をかけているせいで、なおのこと冷たい印象を与える。清潔感のある黒髪に、高い鼻梁と形の整った薄い唇——どこをとっても完璧としか言いようがない。

「謝罪は結構です。悪酔いしているようですが、シラフだろうが、言い訳になりません。迷惑

なことには変わりありませんので」

「はっ……!?!」

彼の言うことはもつともだ。もし自分が志穂と同じようなことを酔っぱらった男にされたとしたら、同じく迷惑だと思っただろう。

「ただ、言い方ってもんがあるでしょ!」

「あの……っ……むぐ!」

「本当にすみませんでした! ほら、戻ろう! ね?」

里美は思わず文句を言いそうになった私の口を手で塞ぎ、さらに志穂の腕を掴んで席へ戻る。

とんだ巻き添えを食らい、かなり後味が悪い独身最後の夜になった。

もつと綺麗な思い出にしたかったのに……!



失礼イケメンからの攻撃も食らったことだし、今日は節約しないでタクシーに乗って帰ろうと思っていたら、財布にあと千円しか入っていないことを思い出した。

下ろし忘れて、飲み会分のお金しか入ってなかったんだっ!

「くーっ、最悪……!」

急げばまだ終電に間に合いそうだ。私は駅へと急いでいた。チラチラと腕時計を見つ、前を歩いている人々を次々と抜いていく。

この調子だったら間に合う。そう思った瞬間、なんとパンプスのヒールが溝にはまって、ポキッと折れてしまった。

運が悪いときは、とことん悪い。

「う、ひゃっ……!?! んぶふっ!」

バランスを崩した私は、目の前を歩いていた背の高いスーツ姿の男性に顔からぶつかってしまった。顔面を強打したせいで、鼻がツンと痛み、涙が滲む。

やってしまった……

男性のスーツには、私のグロスとファンデーションがベツタリ付いている。

「ひいっ!?! す、すみません……!」

男性はぶつかられた衝撃に驚いて一瞬立ち止まったけれど、振り返ることなく再び足を進めようとする。

ええっ!?! ちょ、ちよつとー!

彼は背中に化粧が付いていることに、全く気づいていない。いや、背中だから気づいていたら驚くけど、普通は振り返ってどんな状況か確認するよね?

ヒールの取れたパンプスを履き直して、『待つて下さい』と言いながら追いかけるけど、全然振り向いてくれない。

「待つて下さい! すみません! ちょ、ちよつと待つて下さいーいっ!」

やっこのことで腕を掴むと、男性はビタリと足を止めた。

「……何か?」

振り返った彼を見て、絶句する。

私がつかつたのは、なんとバーで「喝されたばかりの、あの失礼イケメンだったのだ。よ、よりによつて、こいつによつたかとは——!

「また貴女ですか……」

「え、えーっと、すみません。わざとじゃないんです。あ、あの、今ぶつかった拍子にですね。あなたの背中に化粧を付けてしまいました……」

失礼イケメンは眉を顰め、大きなため息をついた。

「貴女がどれだけ男性に飢えているのかは知りませんし、知りたくもありませんが、迷惑です。他を当たって下さい」

「……は!?!」

まさか、またナンパしてると思われた!?

頭と血が上って、血管がプチッと切れる音が聞こえた気がした。

「先ほどは不快な思いをさせてしまつて、申し訳ありません。でも、今はまったくもつて偶然です！ 相手が選べたなら、あなた以外の人にぶつかつてますしっ！」

「へえ、そうですね」

へえつて!? 信じてないでしょ!

また頭の血管の二、三本が、プチプチと切れる音が聞こえた気がした。

「いやいやいや！ 本当にナンパじゃありませんよ!? とても素晴らしい容姿を持つていらつしやるようなので、いつも苦勞なされているのかもしれないが、少々自意識過剰じゃありません!? 私は綺麗な顔立ちを見るのは、芸術品を鑑賞する意味では好きですけど、恋愛感情を持つて見たことは一度もありませんし、今後ありませんから！」

鼻息を荒くしながら捲し立て、睨んでやる。すると、失礼イケメンが目をキョトンと丸くした。

「……女性からそのような言い方をされたのは、初めてです」

小さな声で呟かれ、ハツとする。よくよく考えてみれば、さつきから失礼なことをしているのはこちらの方なのに、つい怒りを爆発させてしまった。

怒らせちゃったかも。いや、これは怒るでしょう!

恐る恐る彼の顔を見上げると、なぜか笑つていた。

なんで笑つてるの!? 怖っ!

「えーつと……と、とにかく、すみませんでした！ 汚れを落としたいので、後ろを向いていただけませんか？」

「後ろを向いた瞬間、刃物でブスリと……?」

「いや、しませんし！ ていうか、早くして下さいっ！」

早くしないと終電がなくなる。自ら彼の背中の方に回り、ティッシュで化粧を拭き取つてみた。

うわあ、どうしよう……全然取れない。

「まだですか？ 他人に背中を任せるといふのは不愉快極まりないので、さつきとして欲しいのですが」

駄目だ。これ以上擦つたら生地が毛羽立つ。

「あの……言いくいんですけれど、事態は思ったより深刻みたいです。もちろん料金はお支払いしますので、クリーニングに出していただいた方が……」

「はあ……」

面倒くさそうな返事を聞きながらお財布に手を伸ばしたとき、千円しか入っていないことを思い出して、冷や汗が流れた。

クリーニング代、千円じゃ……た、足りない……よね?

慌ててメモ帳に自分の名前と電話番号を書き、破つて差し出す。

「あの、これを……！」

「なんですか？」

「実は今、手持ちがないんです。クリーニング代をお支払いしたいので、かかった費用をお知らせいただけませんか？ 本当にすみません！」

失礼イケメンは訝しげな表情をするばかりで、メモを受け取ってくれない。

「あのー……？」

「いえ、結構です。クリーニング代も持ち合わせていない気の毒な方に、払っていただくわけにはいきませんから」

「きつ……気の毒!？」

失礼イケメンは失笑すると、人込みの中に消えていく。

呆氣に取られて固まっていたら、完全に彼の姿を見失ってしまった。

「……っ……きよ、今日はたまたまなかつただけで、いつもはありますからー！」

悔しさのあまり叫んでみたけれど、奴に届いているかどうかはわからない。周りの人にジロジロ見られ、慌ててその場を走り去った。

うう、なんて最低な独身最後の夜なの……！ やっぱり私、男なんて大嫌い！



翌日、私は清楚なお嬢さん風のファッションに身を包み、父と母に付き添われ、宝条家が鼠屑にしているという銀座の一流ホテルへ来ていた。

昼食をとりながら顔合わせし、その場で婚姻届にサインをする手筈になっているのだ。高級レストランのランチ、きつと美味しいんだらうなあ……できれば結婚うんぬんは抜きにして、純粹にご飯を食べに来たかったよ。

沈んだ気持ちでレストランに入ろうとすると、母から待ったがかかった。

「何？ どうしたの？」

「……うーん、宝条さんはこの格好、気に入ってくださいるかしらね？」

「気に入るも何も、条件に合う女なら誰でもいいんですよ？ 問題ないよ」

手持ちの服で間に合わせようと思ったのに、両親から新調しろとしつこく言われたため、上から下まで全て買い揃えたのだ。しかも今日は早朝からわざわざヘアサロンに行かされたから、眠くてたまらない。

母は不安そうに、私の頭のとっぺんからつま先まで何度も見直す。これで五度目だ。

いい加減納得して欲しい。気に入らないところがあっても今からでは直しようがないし、



ヘアメイクや服装が素晴らしかったとしても、元が元なのだから、諦めて欲しい。

「ほら、入り口で立ち止まってるで入るぞ。もうすぐ約束の時間だ」

「そ、そうね。行きましよう、夏奈」

「へえい……」

父に続いて店内へ入ると、品のいいウエイターがすぐに声をかけてくる。

「いらっしやいませ。ご予約のお客様でしょうか」

父が苗字を告げると、お待ちしておりました、と個室に案内された。どうやら先方はもう到着しているらしい。

この扉の向こうに、形だけの夫婦とはいえ、私の旦那になる人がいる……

「……っ」

心の準備をするために、深呼吸しようと思ったのに、ウエイターがさっさとノックをして、扉を開けてしまう。

「失礼致します。白咲様が到着されました」

心の準備はゼロ。心臓がドキドキと早鐘を打つ中、うつむきながら両親に続いて部屋に入る。

ど、どうしよう。予想外に緊張してきちゃった。

さっきまでは不安そうな母をなだめていたぐらいだったのに、あの余裕はどこかへ

行ってしまった。席に着いても、相手の顔を見ることができない。

「顔合わせまでずいぶん待たせてしまって申し訳ない。うちの息子の都合がなかなかつかず、迷惑をかけてしまったね」

「いえいえ、とんでもございません。こちらが娘の夏奈です。不束な娘ではありますが、どうぞよろしくお願い致します」

ちゃんと顔を上げて、挨拶しなくちゃ……

気合いを入れるために膝の上でギュッと拳を握り、静かに顔を上げた。

「は、初めまして、白咲夏奈です。どうぞよろしくお願ひしま……」

目の前に座っている人物を見て、私は言葉を失った。

座っていてもわかるほどの完璧なスタイルに、艶やかな黒髪、そして鋭い印象の目と眼鏡。嫌味なほど高い鼻に、雑誌で『素敵な唇特集』があったらナンバーワンを飾りそうなほど形がいい唇を持った芸能人顔負けの美丈夫。

「……貴女は昨日お会いした、気の毒な方ではないですか」

「ほあっ……!?!」

そこに座っていたのは、なんと昨夜の失礼イケメンだった。

## 第二戦 あんたなんて絶対好きにならない!

「可愛らしいお嬢さんだ。うちの息子にはもつたいないぐらいだよ。な? 母さん」  
 「ええ、本当に。可愛い娘ができて、私ったら年甲斐もなくはしゃいでしまったわ」  
 上等なスーツを着こなした失礼イケメン父と、これまた上等な着物を着こなした失礼イケメン母が品のいい笑みを浮かべる。

「いえないえ、そんなことはございません。とても気の強い娘で……お恥ずかしい限りなのですが」

「まさかうちの夏奈が、こんなに素敵な方のお嫁さんになるなんて思ってもみませんでした」

お互いの両親が会話を弾ませる中、私はたらふくマスクラを付けられた目を見開いたまま固まっていた。一方、失礼イケメン……いや、瑛知さんの方は口元を意地悪そうに歪め、ジッとこちらを見ている。

だれか、夢だと言つて! 戸籍上だけとはいえ、こんな奴が夫になるなんて絶対イヤだ!

「こんなに素敵な方が旦那様になってくれるのに、別居だなんて残念ねえ……」

「なっ……ちよつと、お母さんっ……!」

いやいや、今になって同居だなんて言われたら、私、窓ガラス突き破つてここから飛び降りるからね!! 着地して、遥か遠くにランナウェイしますよ!!

「こんな素敵な人との間に産まれた子供なら、絶対可愛いわよ」

「ちよ、ちよつと! さつきから変なことばかり言わないでっ!」

すると先方のご両親の目が、キラリと光る。

「そう言っていたら助かります! 実はこちらの事情が変わってしまいましたね。実は、うちの長男とその妻が失踪したんです」

「ええっ!?!」

ここが高級レストランだということを忘れて、両親と共に大きな声を出してしまおう。

「あ、いえ、事件に巻き込まれたなどではないので、心配なさらないで下さい。お恥ずかしい話なのですが、突然『オレは跡は継がない。オレはオレの道を歩む!』と言い出しまして……夜逃げしたあげく一方的に退職届を送りつけてきたので、勘当することにしたんです」

嫌な予感がしてならない。背中に冷や汗が流れ、私はゴクリと生唾を呑み込んだ。

「あ、あの、それって……その、つまり……?」

「つまり、跡を継ぐのは次男である瑛知になりますね。数日後には社長就任式も控えています。長男夫婦にはまだ子供がいないので、うちには将来にそなえて跡取りになる子供が必要です。夏奈さんには色々条件を出したにもかかわらず申し訳ないのですが、瑛知と一緒に住んで、瑛知の子を産んでもらえませんか？」

「な、な……ななな……なな……」

言葉が出ない。

何これ、え、夢？ 悪夢？ ここの窓を突き破ったらその衝撃で、夢から覚める？

「そうだったんですか。いやー孫の顔が楽しみですね！ うちの娘は平々凡々ですが、瑛知くんは芸能人のような顔立ちですから、妻の言うようにきつと綺麗な子が産まれますよ！」

うちの父は一切戸惑うことなく、満面の笑みを浮かべている。

は!? 何言っちゃってるの!? 約束守つてよ！ 私がこの結婚を承諾したのは、最

初に提示された条件があつたからなのに！

「不束な娘ですが、どうぞよろしくお願いします」

お母さんまで何言ってるの!? イケメンのオーラにあてられて舞い上がっちゃったの!? いや、確かにすごいイケメンだけど、すごい性格悪いんだよ？

って心の中で呟いている暇はない！ 早く何か言わないと、私の未来が真っ暗にな

る！

「あ、あの………つ………ちょっと待って下さい！」

焦って大きな声を上げると、全員が私に注目する。

うわっ………すごい見られてる！

一瞬怯んだけど、勇気を出して続けた。

「話が違います！ 私が籍を入れることを承諾したのは、最初の条件があつたからで、……い、今さらそんなお願いをされても困ります！ 一緒に住むなんて考えられませんが、……」

「か、夏奈……何を言ひ出すんだ……」

それは私のセリフだから！

狼狽する父を、ギッと睨みつける。

子供を産めって、オブラートに包まずに言えば、つまりエッチしろってことでしょ!?

顔が赤くなるどころか、真っ青になる。

無理！ 絶対に無理！ だって私、恋愛経験ないし、これからだつてするつもりもないし、つまり未開通……コホン、失礼。しょ、処女なんだから、絶対に無理！

「それに、初めの条件なら了承する女性はいなかったかもしれませんが、今なら私じゃなくてもいくらだって相手はいらっしゃるでしょう？」

「確かにそれは……」

瑛知さんのご両親が考え込むのを見て、もうひと押しだと感じた。  
よおおおし……っ！

「ですから、この話は……」

勝てる……！

そう確信して、言葉が続けようとした瞬間――

「俺は、夏奈さん以外考えられませんね」

「……は!?」

胡散臭い笑みを浮かべて、瑛知さんがとんでもないことを言い出した。

「俺は夏奈さんとしか結婚したくありません。他の女性とは結婚する気はまったく起きませんので、観念して俺の妻になって下さい。……というか、なっていただけないなら援助しませんよ？ たとえお父様の会社が持ち直したとしても、圧力をかけて全力で潰します」

「はあああ……!?」

何言ってるの!? こいつ……！



「妻になんてなるか！ 父の会社？ 潰せばいいじゃない！ やれるもんならやってみなさいよ！ バーカ！」

――と、言っちゃれたら、どんなにすっきりしただろう。

顔合わせのあと、私は予定通り失礼イケメン……いや、瑛知さんと籍を入れた。

家族を路頭に迷わせることはやっぱりできない。

瑛知さんの希望で結婚式をしないことになったのは、不幸中の幸いだった。

ちなみに理由は『面倒なことはやりたくない』かららしい。私も全く同意見だったけれど、騒ぎ立てて強がっていると思われたくなかったのでも、『わかりました』とだけ答えた。

そして顔合わせから二週間経った土曜日、私は瑛知さんが元々住んでいた家に引越した。

「こちらを宝条夏奈さんの部屋にしたいだいて構いません。好きに使って下さい」

「……どーも。というか、いちいちフルネームで呼ばないでよ。特に苗字を強調しないで！」

「その顔が見たくて言っているんですよ。宝条夏奈さん」

は、腹立つー……！

瑛知さんの家は、代官山にある高級マンションの一室だった。

緑の中にある五階建てのマンションで、玄関ホールではコンシェルジュサービスが利用できる、二名の警備員が常駐している。

部屋はリビングの他に五つもあって、どの部屋も無駄に広かった。

私にあてがわれた部屋もとても広く、十五畳以上はありそうだ。実家から運んできた私の荷物はかなりの量だったのに、この部屋に運ぶとすくすく少なく見える。

さ、さすが宝条グループの社長の家……！

キョロキョロソワソワしていると、瑛知さんがジッとこちらを見ていた。

「何？」

思わず身構えると、瑛知さんがニヤリと笑う。

「いえ、山奥から都会に出てきて、見る物全てが珍しい人みたいだなあと思いました」

聞かなきゃよかった。腹立つー！

「うるさいな……というか、敬語はやめてくれない？　なんだかむず痒いし、私もとつくにやめてるわけだしさ」

敬語とは、読んで字のごとく敬意を表す言葉づかい。こいつへの敬意など、私の中には存在しない。誰が使うか！

「ああ、俺は敬語がデフォルトなんです。他人や両親、目上、目下にかかわらず」

「……へえ、そうなの？」

やつぱり変わり者だわ、と言いつうになつたのを、すんでのところで呑み込んだ。

「ええ、ですから口調を変えるというのは、非常に面倒ですね。なにせ相手が貴女ですし……」

「前言撤回。ぜんげんてつつかいあんたと話していると腹立つから、改めなくてもいい！　っていうか話さない！」

「そうですか。それは助かります」

悪態をつけてやったのに、瑛知さんはなぜかとても嬉しそうに笑う。

わけがわからない。同じ日本人のはずなのに言葉が通じていないのだろうか。誰か通訳の人、呼んできて！

「……あのさ、ずーっと気になってたんだけど、なんで最初に出した条件が別居と顔を合わせないことだったの？」

私にとっては好都合な条件だったけど、一体どうしてそんな条件を出したのか気になつてた。

「俺は、生活スタイルを乱されるのが大嫌いなんです。女性なんて面倒なものに関わらないで、一生独身でいたかったんですよ」

「はあ……」

モテない男性が聞いたなら、さぞかし腹が立つセリフに違いない。けれど、過去に女性関係で何か面倒事に巻き込まれたことがあるのだろう。

「ですが、両親が毎日のようにしつこく結婚して欲しいって言うものですから、普通の女性ならば絶対に了承しない条件を出したんです。もし奇特な方がいたとしても、戸籍上夫婦になるだけで、生活スタイルは独身のときとなら変わりありませんしね。虫よけ的な役割も果たしてくれるでしょうし」

私は蚊取り線香か！ 奇特で悪うございましたねっ！

「じゃあ、どうして顔合わせの場であんなこと……私じゃなきゃ結婚しないなんて言うたの？」

私の第一印象は最悪だったはずだ。それなのに、意味がわからない。

「貴女は質問ばかりですね」

面倒くさそうにため息をつかれ、その場にあった中身入りの段ボールをぶつけてやりたくなったけど、なんとか耐えた。

「まあ、一目惚れしたとか、あの場で再会して運命を感じた……なんていう不愉快な勘違いをされては困るので、ご説明しますが……」

そんなこと思われていたら、こっちが不愉快だし！

「夏奈さんは、俺のこと嫌いですよね？」

「うん、嫌いっていうか大嫌い。今すぐ離婚したいもん」

キツパリ言い切ると、瑛知さんがまた嬉しそうに笑う。

だからなんで笑うの!? 気持ち悪い奴だなあ。黙っていたらイケメンなのに……

「だからですよ」

「……はあ？」

まったくもって意味がわからない。罵られるのが好きなのだろうか。

「結婚してうっかり好きになられたりでもしたら、俺の生活スタイルを脅かすでしょう? でも、夏奈さんは俺のことが嫌いで、今後も好きになりそうにない。そこが気に入ったんですよ」

今、改めて確信した。やっぱりこいつすごい変わり者だ。

「質問は終わりですか? では、これで失礼します」

終わりですかと尋ねたくせに、瑛知さんは私の返事も聞かずにさっさと部屋を出ていった。

私は結婚指輪として彼から貰ったダイヤモンド付きプラチナリングを見ながら、大きなため息をつく。

「変わり者だし、いちいち嫌味で腹の立つ奴だけど、恋愛に興味が全くないみたいだし、

生活に干渉かんしょうされる心配もない……」

でも、夜の生活をしなきゃいけないわけで……

「うううう……っ……やっぱりやだーっ！」

ジタバタしていたら、段ボール箱に足の小指をぶつけて悶絶もんぜつする。

「………いったあああああっ！」

痛みが治まる頃には、私はなぜか悟りさとを開いた気分になっていた。

「………もう考えてもどうしようもないんだし、さっさと荷解にほどき済ませちゃおう……」



荷解きを済ませると、いつの間にか窓から夕日が差し込んでいた。

「結構かかっちゃったな………お腹空いた」

もうすぐ夕食時——一応戸籍上は妻だし、この家賃や食費、光熱費等は瑛知さんが全て負担してくれるらしいし、食事ぐらいいは作った方がいいよね。

「ええーっと、ここから一番近いスーパーは………っ」と

お金持ちの人が食べる夕食って、どんなのだろう。

スマホで近くのスーパーとレシピを検索していたら、ドアをコンコンと叩く音が聞こ

える。

あ、もしかしてお腹空いたって、夕飯の催促さいそく!? まずい。まだ買い物どころか、メ

ニューも決まってるじゃないよ!

「は、はい?」

「夕食ができました。冷めないうちに食べて下さい。リビングで待っていますので」

「………えっ!?」

瑛知さんが夕食を作ってくれた!? しかも、私の分まで!? というか待っているって一緒に食べようってこと!?

聞き間違いかと思ひ、恐る恐る部屋の扉を開くと、すごく美味しそうな匂いが鼻をくすぐる。と同時に、衝撃の光景が目飛び込んできた。

「何を驚いているのですか?」

「な、何それ!」

なんと百八十センチ以上ある男が、ピンク色のエプロンを着けていたのだ。しかも、フリルやリボンが付いた大変可愛らしいデザインのものだった。

「に、似合わないっ! 激しく似合わないよ!」

「………ファッションで身に着けているのではなくて、服を汚さないために着けているだけですよ」

「それにしても、なんでフリルにリボン……？　ま、まさかそういう趣味が……」  
 そう言うと、凍りつきそうなほど冷たい目で睨まれる。

「貴女の期待を裏切って申し訳ないですが、そのような趣味はありません。会社の飲み会で行われたビンゴ大会で偶然当たったものです。プレゼントする相手を探すのも面倒ですし、捨てるのはエコではないので、こうして活用しているだけです」

「いや、期待はしてないんだけど……」

瑛知さん自身が使っているなんて、景品を用意した人は思っていないだろうな……

「そんなことはどうでもいいので、さっさとリビングに来て下さい。熱々のうちに召し上がってもらわないと」

「あ、うん、ありがとう。すぐに行く」

瑛知さんと一緒にリビングへ行くと、ダイニングテーブルに美味しそうな料理がズラリと並べられていた。

「わ、わわ……」

大きなお肉が入ったビーフシチューに、フランスパンを薄くスライスしてカリッと焼いたガーリックトースト。サラダは、水菜とちりめんじゃこの梅ドレッシングサラダと、トマトとモツツアレラチーズのバジルソースサラダと、アボカドと海老のマヨネーズサラダの三種類。全て小さな器に盛りつけられていて、一種類につき二、三口で食べられ

るようになっていた。

「すごい！　これ、全部瑛知さんが作ったの？」

「俺以外に誰がいるんですか。デザートはカタラーナです。冷凍庫で冷やしてありますから、食べ終わったタイミングで出します」

「デザートまで作ったの!？」

驚愕する私を見て、瑛知さんが首を傾げる。

「ええ、それが？」

「や、なんでもない……すごいなあと思っただけ」

どうやら彼にとっては、食事にデザートはつきもののようなのだ。

瑛知さんはフリルエプロンを外し、席に着く。私は彼の対面に腰を下ろした。

「いただきます！」

「どうぞ。いただきます」

スプーンを手に持ち、シチューのお肉を口に入れる。

に、肉がホロホロ溶けた……！　しかもジューシー……！

しっかり煮込まれたシチューは、お肉と野菜の味がしっかり出ていて、大げさな言い方かもしれないけれど、ほっぺたが落ちそうなほど美味しかった。

「な、何これ、こんな美味しいビーフシチュー食べたことない！　どうなってるの!？」



「お口に合いましたか。よかったです」

「お口に合うどころじゃないよ！ どうしよ。幸せ……美味しい……っ！」  
あまりに美味しくて、手が止まらない。

ガリークtoastの味付けも絶妙だし、サラダもサッパリしていて口の中をリセットできるから、こつてりめのビーフシチューなのにいくらでも食べられる。

「どうしてこんなに美味しく作れるの？」

お金持ちは毎日外食ばかりしてそんなイメージがあるけど。

「俺の趣味は料理なんですよ。たくさん食べてくれる治験体ちけんたいができたので、よりよい味を追究できそうです」

デザートのカタラーナを楽しんでいたのに、『治験体』という言葉聞いてスプーンが止まる。

「ち、治験体!? 変な言い方しないでよ！ なんか急に不味く感じてきちゃったじゃない」

もっと別の言い方はなかったのだろうか。

「不味い……? 味が言葉に影響されてしまうとは……まだまだ研究が必要なようですね。明日からはもっと頑張ります」

瑛知さんが不機嫌そうに、少し下がった眼鏡を指先で上げた。

「えっ！ 作ってくれるの？」

今日の夕飯だけじゃなくて、明日も!?

「夏奈さんは朝食を抜くタイプですか？」

「ううん、しっかり食べるタイプだけど、明日の朝食も作ってくれるの？ 私、一応戸籍上は妻だし、家賃や光熱費も負担してもらってるからさ、食事くらいは作るうかなって思ってたんだけど……」

「いえ、結構です。俺は自分の生活スタイルを乱されたくないで最初に言いましたよね？ 自分以外の人間に聖域を荒らされたくないんです」

「聖域？」

何それ。

「キッチンのことです。ですから、料理は一切しないでいいです。というか、しないで下さい」

やっぱり変な奴……。変な言い方せずに、素直にキッチンって言えばいいのに。

「えーっと、わかった。聖域……ぶふっ……キッチンは、荒らさないようにするから安心して」

耐え切れずに嘔き出してしまったけれど、瑛知さんは全く表情を変えない。

「ええ、そうして下さい」

「あ、でも、作ってもらったし、食器洗いぐらいはし……」  
 「……なくていいです。食器洗い機がありますから」  
 聖域……もといキッチンにはとことん入れたくないらしい。料理が趣味だったなんて意外だ。



そして瑛知さんは約束通り、翌日も食事を作ってくれた。どれも涙が出そうになるほど美味しく、こんなレストランがあつたら、絶対毎日通うだろうなと感心してしまった。  
 「お、おいひい……」

「昨日のリベンジはできていますか？」

夕食のチーズ入りロールキャベツを頬張りながら、私は頭が取れそうなほどにコクコクと何度も頷いた。

「瑛知さんって性格は最悪だけど、料理は最高だねっ！」

「そうですか。ありがとうございます」

褒めつつも嫌味を込めたんだけど、まったくもって効いていないらしい。料理を褒められて嬉しそうだ。

変な奴！ でも、本当に美味しい。

私गतロトロのチーズと肉汁たつぷりのロールキャベツを頬張った瞬間、瑛知さんが口を開いた。

「ところで夏奈さん、次の排卵日はいつですか？」

「ふぐっ……!? ……ゴホッ……ゲホゲホッ……！」

いきなりのセクハラ発言に、美味しいロールキャベツが喉に詰まる。水を一気飲みしてロールキャベツを押し込み、キツと睨む。

「へ、変態！」

瑛知さんはフゥ、と呆れたようなため息をつき、空になった私のグラスにミネラルウォーターを注いだ。

「変態とは心外ですね。なぜ俺たちが結婚して、同居することになったか、もう忘れたんですか？」

忘れられるわけがない。

「子供、でしょ？ 忘れてないけど、いきなりそういうことを聞くって……ど、どうなの？」

「子作りに排卵日の把握は不可欠でしょう？」

「そ、それは……そうだけ……」

そうかもしれないけど、排卵日、排卵日って何回も言わないでよ！ 『子供ができませんい日』とか、もつと何か別の言い方があるでしょうに！

子作りの具体的な行為を想像すると、気まずくて彼の顔を見ることができない。一生未開通……失礼！ 体験しないまま生涯を終えると思っていたのに、まさかこんなことになるなんて……

うううう、嫌だ……！ 絶対嫌っ！ いくらイケメンでも、絶対に嫌っ！

「それで、いつなんですか？」

絶望的な気分になっているところに、さらに追い打ちをかけられる。

……でも……排卵日って、いつ来て、いつ終わるの？

生理と違って今まで把握する必要がなかったから、全然わからない。

「え、えーっと……」

最終生理開始日を記入すると、次の生理開始日を予測してくれるスマホアプリを登録していたことを思い出した。

そうだ！ 確かあれには、排卵日も調べられる機能が付いていたはずだ。

ポケットに入れていたスマホを取り出して調べてみると、一番妊娠しやすいのは次の日曜日からだと表示されていた。

早っ……！ そんなに早く心の準備をしろと!?

今月は終わったってことにしちゃいたい。というか、そうしようかな……

そんなずるがしこいことを考えていると、瑛知さんにスマホを取られてしまった。

「あーっ！ ちょ、ちよっと、返して……っ！」

「何を見ているかと思えば、こんな便利なアプリがあるのですね。……なるほど、次の日曜日ですか」

み、見られた。

もう、ごまかすことは不可能だ。

「では、次の日曜日に仕込むとしますか」

「仕込む!? りよ、料理みたいな言い方しないでよ！」

思わずツッコむと、瑛知さんがニヤリと笑う。

「では、言い直しましょうか。次の日曜日、避妊せずにセックスして、中出しを——」

「言い直さないで！ この変態っ！ 変態っ！ ド変態ーっ！」

顔を熱くしながら捲し立てると、瑛知さんはなぜか満足気に笑う。

だ、誰か！ 本当に通訳呼んで！ 外国語が話せる人じゃなくて、動物の心がわかる人と呼んで！

こうして、私の死刑執行日——じゃなくて、初体験の日が決まったのだった。



『すっごく痛かった。でも、大好きな彼と一つになれて嬉しかったデス!』

大好きじゃない彼の場合、ただ痛いだけってこと?

『二度としたくないと思っただけど、何度もしてるうちに気持ちよくなってきちゃった!』  
したくないって言いつつ、結局何度もやっただんかい!

『初めてなのに全然痛くなかった。本当に処女だったのか? って疑われて、喧嘩になっ  
て別れちゃった』

別れたら、どんなにいいか!

月曜日――

夕飯を終えて部屋に戻った私は、仕事帰りにコンビニで買った雑誌を読んでいた。初  
体験特集が載っているそれを、いちいち心の中でツッコミを入れながら読み進める。

「うー……やだよだ! あいつとなんて、したくないいいーっ! 痛いんだよーっ!」

ベッドの上で悶絶しても、状況は変わらない。

喉が渴いたので冷蔵庫にミネラルウォーターを取りに行こうとしたら、瑛知さんがシ  
ステムキッチンの棚の前で、顎に手を当てていた。

どうやら何か悩んでいるようだ。

こいつと、日曜日には……

いやらしい想像をしてしまい、慌てて頭を振る。

馬鹿じゃないの!? 思春期の男子じゃあるまいし!

「ねえ、どうかしたの?」

何気なく声をかけると、瑛知さんはすっごく面倒くさそうな顔をして振り返った。

「いえ、別に」

「そう? 何か悩んでいるように見えただけ……」

「はあ……」

私の言葉をため息で遮った瑛知さんは、気だるそうに眼鏡を上げる。

「あの、余程の用事があるとき以外、構わないでいただけますか? うざったいので。  
それに頻繁に会話を交わすことで、好きになられたら困りますから」

「……は!」

呆気にと取られて、一瞬言葉の意味が理解できなかった。グンと頭に血が上る。

「好きになるわけじゃないでしょ!」 それに声をかけたのだから、あなたに構いたいから  
なんかじゃなくて、そこどいて欲しかっただけだし! デカい図体で冷蔵庫の前を塞が  
ないでよ! 開けられないじゃない!」

フンツと鼻を鳴らし、大きすぎる冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した。このまま部屋に戻るのとは何か負けたような気がするので、リビングに留まってやることにする。

捲し立てたせいで、余計に喉が渴いてしまった。

ソファにどっかり座ってミネラルウォーターをゴクゴク飲んでいたら、なんだか息苦しさを感じた。

ああ、そうか。今日は少し寒いから、エアコン付けてたんだ。なんだか酸素が薄い気がするし、少し空気の入れ替えをしたい。

エアコンの電源を切り、リビングの大きな窓を開けた。

「は……生き返る」

ちょっと寒いけれど、新鮮な空気が美味しい。

すると、ブブブという音と共に、何か塊のようなものが部屋に飛び込んできた。

「うひゃっ!」

危なく顔面にあつかるどころだった。すんでのところであわしたけど、驚きのあまり心臓がバクバクしている。

な、何!? 何が入ってきたの？

「変な声が聞こえましたが、どうしました?」

「ま、窓開けたら、何か入ってきて……」

広い部屋をキョロキョロ見回すと、ゴキブリが壁を這っていた。

な、なんだ、ゴキブリか……ビククリした。

「よりによってゴキブリ……最悪な害虫を入れてくれましたね。なぜ網戸が付いていない方の窓を開けるんですか?」

「あ、ごめん、本当だ。うっかり反対側の窓開けちゃった」

瑛知さんは面倒くさそうに辺りを見回し、新聞紙をクルクルと丸めた。それを対ゴキブリ用の武器にするつもりなのだろう。

「……というか、たかが虫ごときでキヤーキヤー騒がないで下さいね? そういうあざとい仕草は、全く可愛いと思えませんから」

横目でジトリと睨まれて腹が立った私は、瑛知さんが持っていた新聞紙を奪った。

「は!? あんたに可愛いと思われるでも、ちっとも嬉しくないから! 想像しただけで寒気がするし! ……おりゃっ!」

ゴキブリに殺意を感じさせないように素早く近づき、スパーンと叩いてやった。

虫なんて怖くない。家で虫が現れたとき、退治するのは私の役目だったのだ。

床に落ちていた絶命したゴキブリを、厚めに取ったティッシュで回収して、ビニール袋の中に閉じ込める。そして新聞紙と一緒にゴミ箱へ放り込んで一丁上がり!

「たくましいですね……」

「女が全員虫を怖がると思ったら、大間違いだし！」

「どうだ見たか！ というようにふんぞり返ると、瑛知さんがフウ、とため息を零した。こほ  
「どうやら、性別を間違えて産まれてきたようですね」

「はあああ!? あんたも新聞紙で引っぱたかれて、ゴミ箱に捨てられたいの!?」  
食ってかかると、瑛知さんは口元を綻ばせた。

「……ふふ」

なんか嬉しそう!?

こ、こいつ、もしかして、叩かれたり、なじられたりするのが好きタイプなんじゃ……

「き、気持ち悪いから、変なタイミングで笑わないでよ！」

若干引きつつもさらに攻撃すると、瑛知さんはまた口元を緩めた。

「ふふ」

ま、ま、また笑ってるー!

本当に変な性癖があったら、どうしよう! 縛って欲しいとか言われたらどうしよう!

「き、気持ち悪っ！」

思わず零れてしまった本音を聞いた瑛知さんは、またまた嬉しそうに笑ったのだった。



そして決戦当日の日曜日――

私はお水すら喉を通りそうにないほど、複雑な心境にあった――……と思っていたのだけだ。

「はー……美味しかった! お店のラーメンよりも美味しかった! 私、スープを全部飲み干すのって、初めてかも」

じっくり煮込まれた豚骨スープ、口の中でトロトロに溶けるチャーシュー、絶妙な味付けの半熟卵。

これは料理じゃない! 芸術! ……と称したくなるほどの美味しさだった。

「そうですか。それにしても、貴女はよく食べますね。見ていて気持ちがいいですよ。食後に桃のジュエリートも食べますか?」

「も、桃!? 食べるっ！」

美味しすぎる昼食に、複雑な心境だったことなど忘れてしまった。

満腹になったお腹を撫でていたら、瑛知さんが意味深な笑みを浮かべた。

「脱がせたとき、そのお腹がどれだけ膨らんでいるか楽しみですね」

「……ん、な……っ!？」

夢見心地の気分から真つ暗闇の現実に取り戻されて、絶句する。

こんな奴に私の裸をどう思われようと、関係ないし!

と思いつつも、部屋に戻った私はファンファン鼻息を荒くしながら腹筋をしていた。

やっぱりあいつにだらしない体だと思われるのは、腹が立つ!

「ふ……ぐっ……ふううー……っ……き、きついいいー……!」

五十回やったところで、体力が尽きた。

「こ、これくらいで……十分、でしょ……お水飲みたい……」

ヨタヨタしながらキッチンへ向かうと、瑛知さんがまたシステムキッチンの棚と睨めっこしていた。

「やはり、棚に仕切りが欲しいですね。もう二つ……いや三つほど……」

瑛知さんはリフォーム会社のチラシを手を持っている。

棚にはたくさんの鍋や、調理器具がギュウギュウに詰まっており、無法地帯の様相を呈していた。

「……もしかしてこの前から悩んでいたのって、それ?」

瑛知さんのため息をつきながら、洪々振り向いた。

「うざったいから、構わないで下さいと言ったはずで……いや、まあ……同居している

## 立ち読みサンプルはここまで

のですから、いきなり業者が入ってきたら驚きますね。ここの棚に三つほど仕切りを付けてもらおうと思っっています」

「ふうーん……」

「工事の日程が決まったら、改めてお知らせしますので」

見た感じ、業者を呼ぶほどのことではなさそうだ。

一度部屋に戻り、工具箱と木材を持って、再びキッチンに向かう。

「何を始める気ですか?」

瑛知さんが驚いた様子で私を見ている。

「仕切り作るんでしょ? それくらいなら業者を呼ぶ必要なんてないよ。私が作る」

「夏奈さんが? ……破壊する気ですか?」

思いつき訝しげな目で見られたものだから、少しムカッとする。

「『作る』って言うてるでしょ。いいから、あっち行って。気が散るから」

半ば強引に瑛知さんをキッチンから追い出し、鍵をかけて仕切り作りに取りかかった。

これで邪魔者は入ってこれない!

「よし、やるぞー!」

ちょうどキッチンの棚に使われている木材と似た物があつたので、それを使うことにする。今、なんかノックされた気がするけど聞こえなかったフリ!